

願成寺報

平成二十七年十一月二十七日

〒四四〇・〇八二二 豊橋市東新町二十八番地

☎〇五三二・五二・九六〇一

前坊守 ご弔問の御礼

前坊守の葬送に際し、通夜は寒く、葬儀は雨の悪天候の中、沢山の皆様にご弔問頂きました。篤く御礼申し上げます。突然のことで準備もなく、慌ただしく過ぎ、至らぬ所が多かったこと、深くお詫び申し上げます。来山の際は、故人との想い出等、お聞きしたいと願っています。是非、庫裏をお訪ね下さい。

報恩講のご案内

今回は前坊守の中陰中のこともあり、草取り会をお休みします。例年に増して準備がままありませんが、精一杯勤めます。お誘い合わせてお参り下さい。

十二月 五日(土)

午後一時半

法要・法話

岡崎市浄泉寺

午後四時

お非時(お雑煮)

戸田 信行 師

午後五時

法要・法話

住職

六日(日)

午前十時

法要・法話

住職

午前十二時

お斎(昼食)

午後一時半

法要・法話

牛川町正太寺

大河戸 悟道 師

母のこと

長生きに執着し、健康に気を遣っていた母が、入浴中に気を失ったのでしよう、あっけなく亡くなりました。母を知る人々は口々に、佳津子さんらしくないと仰います。長い介護生活を想定していた私は、裏切られた感じがしています。

母はもっと前から私を裏切り者だと思っていたことでしょう。何でも思い通りにしたかった母が、一番思い通りにしたくて、逆にどうにもならなかったのが私だったと思っています。

幼い頃は、寺を生業とした貧乏くさい儉約生活が嫌で、反抗ばかりしていました。

任されて住職になった後は、今度は母に反対されました。

「文句を云う、任せられないのなら、意に叶う人を探せばよい」

「私はいつでも退きます」

「任せても間違いは糾さなければならぬ」

そんな風にいがみ合った母子でした。

けれど：不思議なのです。

風呂に浸かったままの母は、本当に穏やかな寝顔をしていて、そんな顔は見たことない筈なのに、懐かしい感じが致しました。

常に憎み合って邪魔者だった筈なのに、

枕経の時、遺体の傍で勤行する時、涙が止まりませんでした。

お互いの思いは通じ合わなかったけれど、心のもっと深い所で、互いを願い合っていたことだけは確かなようです。

今でも、目頭が熱くなることがあり、何だかとても不思議です。

本願力ニアヒヌレバ ムナシクスグルヒトゾナキ

功德ノ宝海ミチミチテ 煩惱ノ濁水ヘダテナシ

《天親菩薩和讃・親鸞聖人》

● 正信偈ノート⑩・天親章 I

書き直しを恐れず、今、思い浮かぶところを書き留める

黄色の勤行本の

二十九ページから

天親菩薩造論説 帰命無碍光如来
依修多羅顕真実 光闡横超大誓願
広由本願力回向 為度群生彰一心

天親菩薩、論を造りて説かく、無碍光如来に帰命したてまつる。修多羅に依りて真実を顕して、横超の大誓願を光闡す。

広く本願力の回向によりて、群生を度せんがために、一心を彰す。

・天親菩薩 七高僧の第二祖 梵名ヴァスバンドゥ (注筆者)

・論 『浄土論』のこと (注筆者)

・無碍光仏 阿弥陀如来のこと (注筆者)

・帰命 身命をなげだし 如来にお任せすること (注筆者)

・修多羅 一切経 (この場合、浄土三部経) (注筆者)

・横超の： 凡夫を凡夫のまま拯きたいという誓願 (注筆者)

・光闡す 広く明らかに説く (注筆者)

・度す 導く (注筆者)

・一心 阿弥陀仏より賜るとされる信心 (注筆者)

〈浄土真宗本願寺派・注釈版聖典より〉

・天親 (Ⅱ世親) 菩薩

七高僧の第二祖、梵名ヴァスバンドゥ。仏滅九百年 (五世紀)

ごろに活躍した人。北インドの婆羅門の家に生まれる。行者個人

の悟りを説く部派仏教の神髄を『俱舍論』に著す。その後、兄の

勧めで大乘仏教に転じ、心の理論体系である唯識論を完成させる

が、実践として安心は得られず、浄土教に帰依したとされる。

主な著作

『俱舍論』 部派仏教の基礎的転籍

『唯識三十頌』 唯識思想の代表的書物

『浄土論』 自身の信仰の告白



・浄土論

正式には『無量寿経優婆提舎願生偈』、『往生論』とも略されま
す。優婆提舎は論議を意味し、この書物は「無量寿仏を吟味して、
その浄土に生れたいと願った讃歌」という内容を持ちます。

本文は九十六句の偈頌(詩句)と、三千字足らずの長行(解説)
で構成されています。

偈頌は、まず阿弥陀如来への一心帰命を表明し、その理由を国
土・仏・往生人の徳として二十九種を讃え、あまねく衆生と共に
往生したいと結んでいます。

長行は、浄土に往生するための行として「五念門」が開示され、
その行によって得られる智慧と慈悲の徳を「五果門」として説い
ています。

親鸞聖人は、この行と徳は阿弥陀如来により成就されており、
偈頌の一心、すなわち他力の信心に具わっていると頷かれ、論全
体を「一心の華文」と讃えられました。

・廻向文

浄土論・偈頌の最初の四句は、廻向文として抜き出されており、
私達も日々誦誦しています。

世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国

釈迦牟尼世尊よ、我は一心に、遍く世界の闇を照らす光である
阿弥陀如来を仰ぎ、安楽浄土に生れたいと願います

・一心帰命ということ

一心帰命を「如来にお任せする」と訳します。簡単なようです
が、「文句を云わない」と言い換える急に難しくなります。愚痴
ばかりの日暮しだからこそ、そのままの私を無条件に受け止める
ことが出来ない私だからこそ、廻向文の誦誦が大事なのです。

創作・天親菩薩の帰命

当時の北インド・ガンダーラ地方では、部派仏教が百花繚乱し、仏教外の思想宗教も盛んに行われていました。それぞれが自己の正当性・優位性を主張し、他に挑む論争が絶えなかったと云われます。

天親菩薩は、理科系の人だと思えますが、非の打ち所のない論理体系を構築するのに優れた才能を発揮しました。

論争毎に見識を深め、部派仏教を代表する論主となっていました。兄さんは中インドで大乘の教えに帰依したらしいが、情けない：納得しうる論理を究めてこそその悟りであるはずだ。この論争の戦場を離れて悟りがある筈はない。

「大乘は仏説にあらず」の論を本格的に展開しようとした矢先、兄危篤の報が届きます。

慌てて面会に行くと兄は元気で、穏やかに、遍く衆生に発露する大乘の徳を菩薩に諭しました。もともと聡明な菩薩は、すぐに自身の狭い見識を恥じ、多くの大乘経典を解釈し、唯識論の構築に情熱を注ぎました。

そんな中、兄は亡くなります。

懐かしい兄の穏やかな姿を想う時、自身で完成した論理を傍らに、何か足りない：と、疑問がつのります。

その才覚故に「納得し得る」にこだわった菩薩は、客観的であるが故に、帰命から遠ざかっていました。浄土経典に遇い、やっと、その迷いを発見したのだと思います。



興福寺蔵 天親菩薩
Wikipedia より



興福寺蔵 無著菩薩
Wikipedia より

通夜・葬儀の雑感【私見?】

・弔電

真宗では、亡くなった人は、即にお浄土に往生し、阿弥陀仏の衆生救済のお手伝いを始めると教えています。なので、以下の文例は一般的ではありますが、いただけません。

《ご冥福をお祈り申し上げます》

浄土に往生しているのだから、冥福は当たり前です。

こちらから祈ってどうこうなるものでもないだろうし：

本当に冥福を考えるなら、救済の手を煩わせないように、努めて、積極的に導かれようと手を合わせることに肝要でしょう。

《安らかにご永眠されますようお祈り申し上げます》

この文例には悪意さえ感じます。

悪霊となって大暴れされると困るので寝ていて下さい：と。

どんな現実でもありのままに受け止め、前向きに歩むためには、

諸仏のはたらきが私達にとって必要です。

お浄土に至っては、ゆっくり眠りたい願望も分かりますが、

遺族としては「末永く見守ってくれ」を心情とすべきでしょう。

・骨上げの時

こんな風に思う人が多いかも知れません。

《骨になったらお仕舞いだね》

私は火葬について、煩惱を焼き切って諸仏の仲間入りをするための儀式だと思っています。骨になったのではなく、諸仏としてはたき始めるのだから、お仕舞いではなく始まりです。

急いで諸仏になる必要はありません。

煩惱の煩いの中で、諸仏のはたらきを仰ぎ・感じつつ、自らを見つめ、準備怠りなく過ごしつつ、その時を待つのが良いでしょう。

《世親》講談社学術文庫等を参考に創作

行事予定 平成二十八年

月例会の開催日・開始時間を変更しました、ご注意ください。

一月一日(金・祝) 修正会

お正月のお勤めです
簡単なお節を準備します
午前十一時

三月二十日(日・祝) 春季彼岸・永代経法会(成田屋紫蝶師)

落語と法話で楽しく過ごします
お非時(昼食)あり
午前十時

八月十五日(月) お盆・歓喜絵(住職)

法要・法話で亡き人を偲びます
軽食・花火あり
午後六時

九月二十二日(木・祝) 秋季彼岸・永代経法会(戸田恵信師)

お馴染みの先生の情熱的な法話です
お非時(昼食)あり
午前十時

十一月三日(木・祝) 本山納骨堂法会・団体参拝

本山へ貸切バスにて団体参拝します
午前七時ごろ集合

十二月三日(土) 報恩講

御開山聖人御恩に報いる法会です
お非時(昼食)あり
三日 午後一時半から
四日 午前十時から

二〇二〇年十二月

毎月一日

月例会

毎月一日に戻します
午後二時 時間変更の場合があります、
寺にご確認下さい

後記

○人の一生の終わりに残るものは、その人が集めたものではなく
与えたものである

昔、何処か臨済宗のお寺の掲示板に掛かっていた法語です。
大乘仏教の、特に他力の教への表現として気に入っています。
集める方向は、財産・社会的地位・家族、あるいは徳にしろ、
個人の我を強くしていく方向で、部派仏教・自力的だと思えます。
それでは最後に骨しか残らない、淋しい人生となりませんか。
与える方向には必ずそれを渡す相手があります。
その人に輝き続ける多くを残す、有意義な人生となるでしょう。
ただし、与える方向にも注意が必要です。
我を空しくしていく方向を忘れて、自力的になつてはなりません。
与える事への執着を止め、頂く事に専念するのが良いでしょう。
自己都合による選り好みを抑制し、出来事に無条件に手を合わせ、
領いて過ごす生活の中に、必ず開かれてくる手応えがあります。
その手応えを求めて、私達は生まれて来たのではないのでしょうか。
自分の中に自分を育てた世界の全てを観ていくことが、
大乘仏教の、特に他力の教への神髄だと思っています。
○丈夫な胃腸と白くなっていく頭、身体的特徴は母譲りのようです。
都合の悪いことを理論巧みに誤魔化すところ、不器用な生き方、
破れかぶれのおおらかさ等、母によく似ていると思います。
趣味や人生観、中でも信仰において、全く相容れない母子でした。
それでも衝突の中で伝わり合っていた何かがあったと思います。
少なくとも私は、この寺報をあなたのために書いていたのですよ、
いつか「参った」と云わせたくて頑張っていました。
私が遅すぎたのか、母が少し早すぎたのか：
私は、何が残されたか確かめる為にも、この闘いを続けます。
残念ながら、互いに作り合うことが難しかった穏やかな笑顔で、
きつと、ずっと、見守っていて下さい。